

2022年8月7日

わたしは世の光である

ヨハネによる福音書 8：12～20

・「わたしは世の光である」

イエス様は、まずこう言っておられます。「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩まず、命の光を持つ。」と。イエス様に従って歩むならば、命の光を持って生きることが出来るのです。今、私たちは、どれほど光を求めているだろうかと思います。それはここでイエス様が言われているように、私たちは闇の中を歩んでいるのではないかと思わされているからだだと思います。闇の中を歩んでいると思うからこそ、光が必要だと思っているのです。

今、私たちは、本当に先の見えない、そういう現実の中を歩んでいることを思われます。先月の後半から、新型コロナウイルスへの感染者が、高知県でも急激に増えました。ここ数日、過去最高の感染者数を記録しています。振り返って見ると、最初に感染が拡大した時に、このような事態になるとは、誰も想像できなかったと思います。当初は、ワクチンが行き渡るまでの辛抱だという言い方もよくなされていました。私も、その年のクリスマスには、どうにか元通りのお祝いが出来るのではないかと甘い見通しを持っていました。それから2年半が経過しています。未だに収束への道筋は、はっきりとは見えていません。それだけではありません。戦争の問題も本当にどうなっていくのか、分かりません。その戦争によって、世界中がどんな影響を受けていくことになるのか、全く予想できない状態にあるのです。また、世界全体の姿だけではなく、私たち一人一人の歩みも、決して先行きは明るくないのです。これから自分の生活はどうなっていくのか、確かな希望を持つことが出来ている人は、決して多くないと思います。不安を抱えながら、先の見えない道を歩んでいる。その意味で、私たちは暗闇の中を歩んでいるように思うのです。

その私たちに、とイエス様は言われるのです。「私が「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光と持つ。」光、だから私に従う者は、命の光を持つ。」、そうなのです。イエス様の従うことこそ、命の光を得る道なのです。しかし、その言葉を聞いて、大切な言葉だとは思いますが、直ぐに「自分は光を得た」とはならないかもしれません。むしろ、自分は本当に光を得ているのだろうかと思われるかもしれません。イエス様は、ファリサイ派の人たちとの議論の中で、「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光と持つ。」この言葉の内容を、丁寧に示しておられるのです。イエス様の語られた言葉の意味を、丁寧に受け取って

いきたいと思います。

・ファリサイ派の人たちの問い

「わたしは世の光である」、このイエス様の言葉を聞いた時、当時の宗教的な指導者であるファリサイ派の人たちは、ひどい言葉だと思ったのです。こんな言葉を許しておいてよいのか、そういう思いを持ったのです。「世の光」とは、「世界を照らす光」という意味ですが、神の民イスラエルにとっては、特別の意味を持つ言葉でもありました。神様は、苦難の中を歩む神の民イスラエルに救い主を送ると約束されました。神様がお送りになる約束の救い主を表す言葉が、「世の光」だったのです。ですから、ファリサイ派の人たちは、「イエスは救い主と自称している」と思い、批判したのです。

自らを救い主と自称している人は、イエス様が生きられた時代にも多くいたのです。そして、今も、そうして救い主と自称している人たちが少なくないのです。この人たちに共通なのは、自称ですから、自らそうだと言っていることなのです。それ故に、この時のファリサイ派の人たちの問題意識は、決して間違いではないと思います。自らが自称しているということであるならば、救い主であるということは有り得ないではないかということです。

それならば、イエス様は、そうして救い主と自称している人たちと違う形でお示しになっているのでしょうか。自称ではなく、違った形でしめされているのでしょうか。そうではありません。自ら「わたしは世の光」と言っておられるのです。そのことだけに注目をすれば、多くの自称した人たちと何も変わらないではないように見えるのです。では、どこに、イエス様と救い主を自称している人たちを分けることが出来るものがあるのでしょうか。そのことを改めて考えさせられるのではないかと思います。

イエス様は、ファリサイ派の人たちは「肉に従って裁」いていると言います。この「肉」とは、人間を指す言葉ですが、特にヨハネによる福音書では特別の意味を持つ言葉です。「肉」とは人間、それも限りある人間を表す言葉なのです。その人間の判断で全てが分かると思っている姿が、肉に従って裁いている彼らの姿なのです。イエス様はマリヤとヨセフの子どもであり、良い者が出るはずがないと言われ続けたガリラヤ地方の出身なのです。これで、イエス様のことが全て分かったように思っているのです。約束の救い主では有り得ない、これで結論が出ていると思っているのです。そうしてイエス様を見る時、結局、イエス様のことが分からない、理解できないのです。それが、この時のファリサイ派の人たちの姿なのです。

・どこに真実があるのか

では、どうしたら、イエス様を真の意味で受け止めることができるのでしょうか。そのための方法があるのでしょうか。その方法は、唯一つ、イエス様の前に立って、イエス様の声に聞くことです。これ以外に道はないのです。イエス様の御声に聞く時に、真の意味でイエス様を知ることができるのです。

イエス様の声に聞く時に、イエス様のことが分かる。そのことを考えていて、心に浮かんだことがありました。先週日曜日の午後、瀬戸キリスト伝道所西村牧師の就任式がありました。私は、司式を依頼されていましたので、説教を担いました。そして、聖書箇所として、ヨハネによる福音書 10 章を選びました。何度か説教しているのですが、改めてああこういうことかと思われた言葉がありました。イエス様は「羊もわたしの声を聞き分ける」と言われました。羊である私たちは、羊飼いであるイエス様の声をちゃんと聞き分けると言われているのです。この言葉を聞いて、とても考えさせられたのです。自分は本当にイエス様の言葉をちゃんと聞いているのだろうか。聞き分けているのだろうか。そういう思いがしてきました。

このイエス様の言葉は、実際の姿が背景になっています。羊は、実際に羊飼いの声をちゃんと聴き分けるのです。このことの持っている意味、改めて考えさせられるのです。これは、羊が何か素晴らしい聴力を持っていて、そうだから羊飼いの声をきき分けることができる、そういうことではないのです。むしろ、羊飼いは、その羊のために命を捨てる、その覚悟を持っている。その覚悟を持った者の言葉だからこそ、羊は聞き分けるのです。ちょうど、生まれて間もない赤ちゃんが、親の声に反応するようにです。そのように、羊である自分のために、命を捨てる覚悟を持っている、それが私たちの羊飼いであるイエス様の御心です。その御心を持った方の言葉だからこそ、私たちはその声から、イエス様がどのようなお方であるか知ることができるのです。

ですから、人間の判断から出てくる結果、分かっているという思い込み、肉に従っての判断を離れるのです。そして、率直にイエス様の前に立って、御声を聞くのです。その時、この方がどういうお方であるか、分かるのです。

そう思って考えていて、今日の箇所でもとても心に残った言葉がありました。それは「どこから来て、どこへ行くのか、わたしは知っている」と言われたことです。この言葉は、直接には、イエス様が自ら、神様から遣わされて、そして、神様の御許へ帰ること、つまり、約束の救い主であることをお示しになっている言葉なのです。勿論そうなのです。しかし、これからイエス様が実際に歩まれることになる道筋を考えると、この言葉、単なる説明のための言葉ではないことが分かります。特に「どこへ行くのか」という言葉は、イエス様が定められた時に、神様の御許へ帰られることを示

しています。しかし、それは、単に神様の御許へ帰るということではありません。どの様にしてなのか、イエス様十字架につかれることを通してなのです。つまり、私たち人間一人一人のために、命を捨てる、その思いを持って、「どこへ行くのか、わたしは知っている」と言われていることが分かります。

そして、神様の御許へ帰ることは明確な目的があるのです。ヨハネによる福音書14章で、「父の家に…場所を用意しに行く」と言われるのです。そして、「場所が用意出来たら、あなたがたを迎えに来る」と言われるのです。つまり、イエス様が神様の御許へ帰られるのは、私たちを迎える場所を用意するためなのです。そして、私たちを迎えるためのです。つまり、「どこから来て、どこへ行くのか、わたしは知っている」という言葉は、「あなたのために命を捨てる」、その思いを持って語られている言葉なのです。そして、神様の御許にあなたを迎える場所を用意する、その御心から出ている言葉なのです。

このイエス様の言葉をそのまま受け止める時、イエス様は、私たちが思っていた存在とは全く違うことが分かります。歴史上の偉人でも、愛の実践者でもなく、神様から遣わされた約束の救い主であることが分かる、そのことを受け止めさせられていくのです。

・神様を知る恵み

そして、イエス様を真の意味で知ることは、更に驚くものを与えられることです。それは、イエス様を知ることは、そのまま神様を知ることなのです。ファリサイ派の人たちが大切にしている神様の掟、律法には、こういう言葉がありました。「二人が行う証しは真実」と。イエス様は、その律法を持ち出されて、私の証し真実、なぜならば、父である神様が共に証しをなされるからだと言われました。そうすると、ファリサイ派の人たちは、直ぐにその言葉に引っかかったのです。どうして、イエス様はここで「父が証をする」と言われるので、では「父どこにいるのか」、イエス様の父であるヨセフが一体どこにいるのかと、イエス様に質問をするのです。この言葉によく示されるように、恐らく、イエス様の言っていることが全く分からなかったと思います。

しかし、この言葉の持っている本当の意味は、イエス様の次のような言葉のよって明確に示されるのです。「あなたたちは、わたしもわたしの父も知らない。もし、わたしを知っていたら、わたしの父をも知るはずだ。」とイエス様は言われるのです。ここに驚くべきことが示されています。それは、イエス様を知ることはそのまま神様を知ることと言われているのです。この時は、ユダヤの祭りの時でした。神様の恵みを皆で祝う、そういう時でした。そして、今、イエス様が語っておられるのは、神殿でし

た。つまり、神様を礼拝する場なのです。ここに集まっている人たち、殊に、ファリサイ派の人たちは、当然、神様を礼拝していると思っていています。つまり、神様のことは十分に分かっていると思っているのです。しかし、イエス様は問われるのです。本当に、あなたたちは神様のことが分かっているのかと問われるのです。結局分かっているのではないと言われていたのです。これは、ファリサイ派の人たちにとっては、本当に意外な言葉であったと思います。

今、この時は祭りの時であると言いました。この祭りは、エジプトで奴隷の生活をしてきた神の民イスラエルを、神様がモーセという指導者をお立てくださって、エジプトから脱出させてくださった、その恵みを忘れないために、毎年行われていたものでした。しかし、その時の人々の思いは、やはり「かつてモーセたちと共にいてくださった」というところに止まっていたのです。なぜなら、同じように大国の支配の中にいる今、歩むべき希望をなかなか持てなくなってしまうからでした。今この時、困難の中にいる。「かつてのモーセたちのように、今の私たちを神様が導いてくださればよいのだが……。」と。つまり、この祭りで覚えている神様の働きは、既に昔話のようになっているのです。それでも自分たちは、神様のことが十分に分かっていると思っています。

しかし、分かっていると思っているその色眼鏡を取ってみて、イエス様の姿を率直にみる時、驚くものが示されるのです。それは、イエス様を真の意味で知ることは、父なる神を知ることであると。そして、そのイエス様を通して受け止めさせられるのは、神様はかつて自分たちの先祖を守り導かれた方としてではなく、今この時、私たちと共におられる方であることを知るのです。そして、そのイエス様がお示しくださる神様の御心とは何でしょうか。それは、少し前のヨハネによる福音書 3 章 16 節にありますように、この救い主をお送りになられるほどに、世を、そして世に生きる私たちを愛された深い愛です。私たちを今もささげ続けている神様の深い愛が、このイエス様を通して、本当にはっきりと示されているのです。

・改めて命の光とは

ここまで一緒に確認したうえで、再び最初のイエス様の言葉に戻ってみたいと思います。「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩まず、命の光を持つ。」、イエス様が私たちの生きる世界の光であるということは、何か漠然とこの世界が明るくなる、見通しが明るくなるということではありません。見通しはいまだに暗いかもしれない、しかし、この方によって棄の意味での希望を与られてくることなのです。それは、いま私たちが生きている現実がどのように見えていたとしても、決して暗闇

ではない、神様の御手から離れていることはない、そのことを知らされることなのです。私たちが暗闇だと思っている現実の只中に、イエス様は共にいてくださるのです。それこそが、私たちの希望なのです。そうして、神様が私たちと共に歩んでくださっているのです。そのことを知って生きることができる、それこそが「命の光」なのです。

ここに、私たちの心を深くとらえる言葉があります。それは、ここでイエス様が「わたしに従う者は暗闇の中を歩まず」と言っておられることです。ここでのイエス様の言い方は、聖書の元の言葉の言い方を踏まえてみますと、「既に暗闇の中を歩いている、だからこれから先も暗闇を歩むことはない」と言われているのです。私たちは、既にイエス様の恵みの光の中を歩んでいるのです。そして、このことを受け入れることこそ、暗闇に見えている現実をなおも歩み続けていく真の力になるのです。神様に支えられ、導かれて、この恵みの道を歩み続けていくのです。